掛け取り万歳

試し読み

かたなかたなり

甲寅ノ事

十の年、祖父と祖母を立て続けに亡くした。

その年――寛永六年は凶星が流れ、黒船が現れた年だからよく覚えている、幼い誠吾は悲しみと失望感を受け止めることが出来なくて、絵や話でしか聞いたことのない異国の、あいつらのせいだと思い込むことでようよう了簡した。

浦賀なんて聞いたこともない土地の名前ではあったけれど、一度だけ異人を見たことがある。日本橋の廻船問屋にやって来た男だった。店の雇った用心棒を両脇にして、通詞を連れているという一行は広小路よりも見世物めいていて石を投げるどころか、ぽかんと見送るしかなかったのだが。

生まれは浅草だとずっと思っていた。寺で遊ぶのが当たり前で、人が絶えずざわざわしている場所、てて親は知らないが、母親はいた、八つになるときに病で死んだ。さっぱりした女だった、さっぱりしすぎていたから知らない父親のことも何もかもを捨てたのさ、と言われてしまえばそうなのかと思うしかなかった。自分には祖父母がいると信じていたからだろう、今となってはおめでたいものだと鼻で笑える。

誠吾は知らなかった、祖父と祖母は赤の他人だった。母親の生まれは相州であったことしかわからない、そちらへ行けばとも考えたが、行ってどうなるものでもない、生前より便りもなければ話もなかった。母も祖父母も何も言わず、何も残さずに鬼籍に入った、残された僅かな金しかない、自分もそうだが誰もが困惑した。祖父は菓子司で職人として奉公していたからそこへ行けるかと思ったが、江戸店を畳むとかで断られた。親戚が誰か、所縁あるものはいまいかと大家の手元に置いてくれて、名主ともども手を尽くしたけど、なんの手がかりもなく一年も過ぎれば持て余すようになる、神社が引き取ってくれたが、いかがわしい占いでもっているようなところで、使いっ走りをさせられていた。夜は賭場が開かれ、掛け取りに行かされたこともある。

着るもの、食うものがあるだけましだとは思った。誠吾よりも幼い子供がぼろ布をまとって目の前を走り抜けるのを見たし、付け火をしたという子どもの裁きを聞いたこともある。御定書によれば子どもは一等軽くなるのだが、付け火は重罪だからどこぞの牢に入れられて十五になったら晒し首にするのだそうだ、と。殺すために生かされるのかと思うとぞっとした。

泥水を掛けられた。

それが、始まりだった。

「……」

肩からひっかぶった水は下肥のような匂いもしている。まだ生臭い方がよかったが、避けられなかった己が悪い。

「…うっ」

往来の誰もがあんぐりとし、また、そっとよけるような仕草をしたが、通りすがろうとする一人の羽織姿のひょろっとした男なぞはあからさまに顔をしかめる。髷も着物も粋人風だが、なにもそこまでと思えるほどの振りがこちんと頭にきた。かけられたこっちのよっぽど臭いのだ、と怒鳴りそうになる。

おれだって、すきでこんな目に遭ってるわけじゃない。

誰彼ともなくいつだって言いたいのだ、何んだ、と。誰が仕掛けるのかわからないが、神社にきてひと月も経たないうちに『呪われた子』と噂されるようになった。嫌がらせもあれば喧嘩をふっかけられることもしばしばだった。この年にしては少しばかり大きく育っているのに、母譲りの強い顔をしているというのもよくなかったのかも知れない、母は穏やかなたちではあったがおなごにしては凛々しい顔立ちだったと思う、若い頃は道場で慣らしたという養祖父は何かにつけて厳しかった。そのせいもあってか己は負けず嫌いで、意気地が張っている。飲み込んでいる、ふぬうと顔に出さないようにしているが、強い顔なので仕方がない。とはいえ、神社の所行に向けられる怨みをおれに向けるなとも思う。慣れたが、慣れない、もともと、賭場なんか開いていることは界隈の親分だって知っているし、良からぬことをしているのはあの真っ黒な神主だ。結わず、総髪ですらない頭に黒尽くしの姿だから洋かぶれの異教だとも言われるのだ。神事もろくにやらない神社で遣われることも掃除のほかは冥加金の催促だったり、有り難くもないような札の届けだった。それで御百度よりも丑の刻参りの効き目がいちばんと言われれば…子どもでも怨みを買うわけである。

「…ちゃん！」
怒りにまかせて橋をどかどかと歩いていたから気付かなかった、振り向けばふっくらした女が追ってきていた。前垂れに隠れてはいるが腹がぷっくりと出ているのがわかる。
「せいちゃん！」
はっとする。
「姉ちゃん！」わああ！
走ってる、転ぶのが得手なのに、転んだら、腹の子どもが！
「なんでっ…」
裾に取りつくようにして追いつくと絞り出すような声を出す。転ばなくてよかった、気が抜けたように相手を見ていると悲しそうな目が見上げてくる。
「え？」
こっちこそ何でだ、腹が出て目方が増えれば動くのも難儀と母親から聞いていたのに。
「なんで、また…」
「りゅう姉ちゃん…」
おろおろと腹と顔を交互に見る、相手は襷を手にしている、何かしているのを放り出してきたような体だった。
「喧嘩したんじゃないし、おれはなにもしてない」
「分かってる。どっこも赤くなってないし、約束守ってくれてるのは」
けど、と俯いてきゅっと前垂れを握り締める。
「どうして、せいちゃんばっかりこんな風になっちゃうんだろ…」
りゅうは祖母の亡き後、預けられていた大家の娘で、半年前に大工の寅市と祝言を挙げていた。住まいも離れ、滅多に会うこともなくなっていたが、お産のためかいまは実家に来ているのだろう、誠吾は弱って眉を下げた。りゅうは長屋の時分からよくしてくれたし、目が大きくてきりっとしてる、きっといい男になるよ、と顔のことも褒めてくれた。神社でやらされていることはあまり話したくなかったし、話さなかった。
「おれがどじだからさ、今日はぼんやりしちまって」避けられなかった。
りゅうの手を外させてとりなすように言った。幸せでいるのだろうし、身重だ、心配かけたくない。
『呪われた子』なんて陰口を言われるようになって、身に覚えのない怨みをぶつけられれば初めこそはぽかんと受けていたりするが、やがては慣れる。罠なんかのたぐいはうまいこと避けられるようになっていた、唾を吐かれたくらいでは手は出さない、足を踏まれても我慢する。だから今日は、自分がうっかりしていたのが悪い。
「……」
りゅうは何も言わない代わりに頭を撫でた。
「せいちゃんはえらいね」
ぴこんと胸の内が弾む。
「きっといいことがあるよ」
りゅうは、大家の次女で、太りじしでおっとりしていたけれど、とにかくあったかくてやさしかった。大家のうちは長女のきりが材木問屋に嫁いでいたが、若い頃は小町と呼ばれるほどの器量のおなごで気の強さも辰巳に負けぬというそれがまるくもならずにきついままだった。若ければまだ我慢もできようものを、あれはいくら何でもと囁かれてもいた、いつだっていちばんでなければが気が済まないというきつい性で、実家に愚痴りに来るたび嫌みともつかない言葉を掛けられていた誠吾はうんざりしていたのを『姉さんは悲しいときも嬉しいときもいつだって名の通りにきりきりしてるから、あれは天分なの』という一言で収めてしまった。よく見たらほんとうにそうだった、なるほど、きりは機嫌が良いときも具合が悪くてもきりきりしている。おいらは小町よりぷくっとした観音様だなあとしみじみ考えたくらいだ。
作る菜はうまかったし、着物を縫ってもくれた、ほんとうの姉のように思っていた。
ほっこりさせる、りゅうの話す言葉や行いにどれほど自分は励まされたかわからない。
「いまはね、実家（こっち）にいるの」
ふう、と花屋の前の柳で息を吐くと腹を撫でながら言う。
「こないだ根岸に行ったからせいちゃんに会おうかと思ってお社へ行ったのよ？」
「えっ？」
聞いていない。
「お腹にあぶないからって止められて大根いただいて帰って来ちゃった」
噂を知っている誰かだろう、これで何かあっては後生が悪いと行かせなかったのだ。妙なことを吹き込まれたのではないかとそっと窺うとりゅうはさっぱりと手を打つ。
「ね。うちに寄りなよ、手なんかも洗って着替えもしよう？　おまんじゅうもあるんだよ」
りゅうの足下を気遣いながら往来を歩く。誠吾は何も知らされていないことにほっとした。
「せっかくなのに、悪ィな。いそいで戻らなきゃなんねんだ」

ケンカイフキニツキ

一

「やかましい！　寝言は寝てから言えてぇんだヨ！」

十軒店の裏長屋から男の土間声が上がった。『チロリ医者』と呼ばれている町医者、小杉勘造の声だ。

「おや、また嫉妬かェ？　辰之進がちょいと来ねぇだけで、大概ぇみっともねぇのゥ」

言い返す声がからかうような調子を帯びている。同じ十軒店の長屋に暮らす小梅婆さんだ。

「やかましい！　誰が嫉妬だ！」

勘造の手伝いをする小梅婆さんはほぼ毎晩、勘造の長屋で酒を飲んでいる。気心の知れた間柄だからか、遠慮のないやり取りはいつものことだ。長屋の連中も心得たもので、怒鳴り声で起こされてもまた始まった、と苦笑いしてまた寝直す。

「しんじついやではなけれども～」

多少掠れて力が弱くとも、往時を思わせる節回しが長屋に流れる。

「うるせぇ！　生ぁ抜かしゃぁがって、年寄りはとっとと寝やがれ！」

勘造がその声を遮った。

「くわばらくわばら」

あっははは、年寄りに似つかわしくない張りのある笑い声を上げながら、小梅婆さんが出しなにぴしゃり、と腰高障子を勢いよく閉めて出た。そのまま酔いの回った多少危ない足取りのまま、小梅婆さんは詩吟を唸る。

こがれこがれてェ、逢う夜はしばしィ……。かつて座敷で散々歌ったものだ。狭い裏長屋の井戸端をよろりよろりと歩みながら、次の節を歌おうとした所で、足が何か柔らかいものを踏みつけた。そのせいで均衡を崩し、ふぎゃ、と変な叫び声を上げてひっくり返った。

「アイタタタ……。誰だェ、井戸端になんぞ放りだしゃぁがって。エエ、いめいめしぃ」

強かに打った尻を擦りながら、暗闇を透かして自分が踏みつけたものを見る。だが、もう流石にこの歳では夜目は利かない。仕方なく、恐る恐る手を伸ばしてみる。なにか布のようなものが手に触れる。それが小刻みに震えて上下していた。

野良犬かェ。

それならば人の気配で吠えるだろう。それよりも先に逃げるはずだ。猫も然り。それに、この布が湿ったような感触は……。

「うぅ……、こ……、ここは……」

布切れが呻き声を上げた。小梅婆さんの酔いが一気に醒める。それでも酒でよれた足を懸命に動かして、もう一度勘造の長屋をどんどん、と叩いた。

「チロリ。オイ、チロリ！」

「うるせぇなァ。年寄りァ、早く寝ろってんだよ」

勘造がぼやく声にも構わず、小梅婆さんは必死に腰高障子をどんどん、どんどん、と叩いた。

「けが人だよ！　早く開けるが良いじゃないかェ。エエモ、けが人だと言うに！」

「ツバでもつけとけ」

医者とも思えぬ言葉を吐きながら、勘造が面倒くさそうに戸締りの芯張りを外した。待ちきれず小梅婆さんががたごとと腰高障子を開ける。

「オイ、いい加減に……」

「わっちじゃねぇわナ。けが人が倒れてるんだよぅ」

小梅婆さんが指す井戸端をちらりと見た勘造ははぁ、と大きな溜め息を吐いた。

「ババァ、とうとう目も悪くなったか。どうせ犬だろ」

「お前こそ酒毒が頭に回ったかェ。喋る犬がいるかヨ」

ち、と舌打ちをした勘造に答えたのか、黒い塊がううん、と呻いた。

「聞いたかェ」

互いに顔を見合わせると、二人して井戸端に駆け出した。

「ババァ、誰か起こしてこい」

井戸端に倒れた身体を抱き起こしながら、勘造の指示が飛ぶ。小梅婆さんは一番手近な長屋を遠慮なく叩いた。

目を覚ますと、一気に周りの音が押し寄せて来るような気がした。かんかんに熾った火鉢で炭が燃える匂い、しゅんしゅんと湯が沸く音と湿った湯気の匂い。ごりごりと響いてくる音と、膏薬と煎じ薬の匂い。がやがやと人の声がしていて、ぼんやりと薄汚れてカビの浮いた天井が見えた。

「おや、目が覚めたようだ」

しわくちゃの老婆が覗き込んだ。

「ここ……は？」

頭がぼんやりとする。自分は何故こんな所にいるんだったろうか。身じろぎした途端に腹に痛みが走る。思わず呻いた。
「寝とけ。斬られたせいで熱が出てる」
こちらに背を向けていた男がぶっきらぼうに言い放つ。他の痛みに圧されているが、胸も息をする度に痛んだ。どこかでぶつけたに違いない。全く、ざまァない。
「ここは医者サ」
老婆が優しく怪我をしていない方の肩を抑えて、大丈夫だと言うように頷いた。その顔に嘘が見えなかったので、そろりと身体を布団に横たえる。身体を起こした途端に、眩暈を起こしていたせいもある。大丈夫と言う言葉を信じたくなった。
「ナァニ、呑んだくれの町医者だがヨ、腕だけは確かだ」
背を向けている男の陰に人がいるらしく、歳の行った男のダミ声が笑った。言葉の調子から恐らくは職人だろう。
「誰が呑んだくれだ。あ？　テメェこそいい加減酒はヨしゃァがれ。二日酔いで梯子から落ちた老いぼれは誰だ」
「そうそ、善治の爺ィは酒の量が多いの欠点サ」
更に顔の見えない老婆の声がする。
「うるせェな、ババァめ。テメェはその口が欠点だろうが」
「ナニサ、わっちのは正直な心根が表れてるってヤツだヨ」
「おきやがれ。つけつけ思ったこと端から言うのが正直だと思っていやがるたァ、恐れ入谷の鬼子母神だ」
「ナニ、陰口じゃあるまいし、正直なのがイッチサ。誰かさんみたいに隠れてこっそり酒をかっ喰らった挙句、酔っぱらう方がよっぽどタチが悪ィわナ」
酒の量が過ぎると論った老婆が勢いの良い口調で、善治と呼ばれた職人の男と言い合いを始めた。
「善治、アンタの負けだヨ」
布団をかけ直してくれた老婆が笑って仲裁を買って出た。
「おっと、小梅観音の御託宣じゃ仕方あんめェ」
善治と呼ばれた爺様が答えて、あはは、と部屋中が震えるようなたくさんの人の笑い声が響いた。
「うるせぇ、うるせぇ。テメェらの勝ち負けなんざァどうだって良いから、終わったらとっとと帰ぇれ」
呑んだくれの医者と言われた男が怒鳴る。年の頃は三十半ばか。
「ジジィ、今度酔っぱらって怪我なんざしやがったら、手前ンとこの女房（カカア）に酒全部捨てさせるからな。よく覚えとけ」
「おっと、くわばらくわばら」
善治と呼ばれた男は、怖そうに肩を竦めながらも、笑い顔で世話になったな、と腰高障子をがらぴしゃと開けて出ていった。その音の近さで初めて、自分が小さな長屋にいるのだと判った。痛む身体を気遣いながら周りを見回す。自分が寝ているのは壁の方に寄せられた煎餅布団らしい。頭の方の壁一面を埋める百味箪笥、人の陰からちらりと覗く薬研。板敷一間きりの長屋で町医者が営まれているとは驚きだ。
「おい、ババァ。そいつに熱冷まし飲ましときな」
「アイサ。今煎じてらァナ」
そんな言葉と共に、男の背中の向こうで水を器に注ぐ音がした。板敷きを踏む音がして、枕元に人が座る衣擦れの音がする。
「サァ、薬湯だ。飲んだらアンタはもうちっとお休みな」
そっと優しく首に手が添えられて、何とも言えない匂いと色をした湯が湯気を上げる椀が突き出される。
「くせぇ……」
「熱冷ましだヨ。ナニ、死にゃァしねぇ。豪儀にマズいだけサ」
思わず漏らした文句をくつくつとしわがれ声が笑う。汗を掻いているらしい。添えられたカサカサの手がひんやりしていて気持ち良かった。
「恨むぜ……」
呂律の回らない口でやっとそれだけを言うと、口元に差し出された薬湯をゆっくり飲む。酷く喉が乾いていて、次第に嚥下する速度が速くなって、気がつけばすべてを飲み干していた。見た目ほどひどい味ではなかったのが不思議だ。
「オヤ、良い飲みっぷりだ」
「そんだけ飲めりゃ、上出来だ」
医者とは思えない男が、横目でちらりと飲み干した椀を確認したらしく、ぼそりと呟いた。それを聞きながら再び布団に横になると、人の良さそうな老婆が額に絞った手拭を乗せてくれた。思わずふぅ、と安堵の溜め息を吐く。
「今はゆっくり休むのが肝心サネ」
その言葉に誘われるように、意識が途切れた。

＊お願いとおことわり＊

本PDFは試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本PDFの内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本PDFを有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋
URL: http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/
Mail: nedocoya@gmail.com
Twitter: @nedocoya4pr